ため池みらいプロジェクト

柴崎浩平（環境デザイン系）

キーワード：農村，ため池，草刈り，コミュニティビジネス，デザイン

1. はじめに

本プロジェクトでは,ため池のある暮らしのみらいを創造していくことを目的とし,水や緑に関する資源（ため池や里山，農業・農地，それらを管理する人材など）の管理・活用に向けた地域連携のあり方を探求している。連携先としては，著者が理事を務める「(一社）ため池みらい研究所」ならびに同研究所に関わるプレイヤーとなる[注1)]。

本プロジェクトは,農山村で活動を展開していきたい学生にとってのプラットフォーム機能を持つ。また,具体のプロジェクトに強い意向を示す学生が複数いる場合は,プロジェクト推進能力を養うためにも組織化（学生団体化）を促している。

昨年度は，2 つの学生団体化を促してきた。1 つは，加古川市の広尾東集落にて，集落と学生を結ぶ活動をおこなう「広尾東ファンクラブ」，2 つは後述する里山づくりに関連する「山採りプロジェクト」である。

本プロジェクトの活動内容として大きくは，「研究・実践活動」と「交流活動」をおこなっている。「研究・実践活動」としては，「草刈りグループの創造」がある。「交流活動」としては，フィールドに赴き,地域のイベントへの参加やフィールドワーク，学内の交流活動などがある。以下，順番に説明を加えていく。なお，2025 年度のプロジェクトメンバーは 3 回生 6 名，2 回生 11 名，1 回生 4 名の計 21 名である。

2. 研究・実践活動

2.1 草刈りグループの創造

草刈りは，農村の資源を管理していくうえでの基礎的かつ必要不可欠な作業である。草刈りの実施主体は，畦やため池の堤体，共有地などの実施場所によって異なるが,集落コミュニティで実施されるケースが多い。しかし，少子高齢化や集落機能の低下にともない,地域の草刈を継続して実施していくことが困難になっている。そこで，多様な立場の人々が参加する新しい草刈りグループが複数生まれやすい仕組みづくりをおこなっている。

写真 1　播磨畦師の活動の様子

写真 2　草刈りフェスの様子

チームで連携
草刈りレース
タイムや刈り目合競い熱戦
雑草処理の大切さ伝える「フェス」

写真 3　草刈りフェスに関する記事（神戸新聞）

これまでに，都市部の住民が有償で草刈りサービスを提供するグループ（名称：播磨畦師）の創造などに取り組んできた[注 2)]。今年度は，播磨畦師の活動に学生が参加し,草刈りをおこなった(写真 1)。また，草刈りに関わる人材を発掘するために「草刈りフェス」というイベントの企画・実施支援もおこなった（2025.11.1@加古川市志方町原地区）（写真 2)。本イベントは，播磨畦師や原地域づくり協議会のメンバー,学生らで構成される実行委員会が主催する形でおこない,新聞記事に掲載されるなど反響もみられた（写真 3）

今後も，単に草を刈るだけでなく，草かりを通した学びや気づきが得られる仕組みづくりを実施していく予定である。

2.1 つくる・伝える-地域デザインプロジェクト-

農産物の生産などに関連した商品のデザインに関する相談を受けることがある。連携先である「志方東営農組合（加古川市志方町)」から,「学生と共に菜種油のパッケージをデザインできないか」と相談を受けた。同組合では，景観維持のため菜種を生産しており 2 年前から本格的に栽培を開始してい

写真 4　学生がパッケージをデザインした菜種油に関する新聞記事（2026.1.13 神戸新聞）

写真 5　菜種油の販売促進に向けて作成したチラシ

る。パッケージデザインに向け，学生有志を募り，プロジェクトチームを結成･作成支援をおこなった。参加した学生（3 名）の動機は「これまでお世話になった広尾東に何かお返ししたい」や「就職先もデザイン系を検討しているのでチャレンジしたい」といった具合であった。作成にあたっては，営農組合へのヒアリングを重ね，菜種油の生産状況や販売方法，ターゲットとなる客層などの情報を整理した。そのうえで，類似商品のデザインや売れ行き情報などを整理し，イメージを擦り合わせた。

学生らは，製品に貼られたパッケージを見て，商品として販売されることにやりがいを感じていた。また，加古川市長への表敬訪問をおこない，加古川市の特産品として売り出されていく期待感も感じていた（写真 4）。さらには，販売を促進していくにあたっては，PR を兼ねたチラシも作成した（写真 5）。

3. 交流活動

大きくは，「ため池みらいフォーラム」の運営サポートおよび発表をおこなった（写真 6）。本フォーラムは，ため池みい研究所が主催するフォーラムであり，学生や研究員が本年度におこなった活動を

写真 6　ため池みらいフォーラムの様子

報告する場となっている（兵庫県東播磨県民局加古川総合庁舎にて 2 月 21 日実施）。参加者は，ため池管理者･農業者の他，大学･教育関係者，行政職員，民間企業など 180 名ほどみられた。

運営にあたっては，当日の司会進行や参加者へのヒアリングをおこなった。また発表では，プレゼンおよびポスター発表をおこない，プロジェクト成果を共有した。

4. 今後の展望

地域から寄せられる相談のなかでも，「2.1 つくる・伝える-地域デザインプロジェクト-」で述べたようなデザインに関する相談は多くある。そこで，デザインに特化したプロジェクトを立ち上げたい。デザインは，依頼者が持つニーズやシーズを見える化する作業であり，WEB・HP やチラシ，商品パッケージ，パンフレット作成など，様々な媒体で求められる。活動を通じて構築してきた多様なデザイナーとのネットワークを活用し，実践的な学習機会を創出することで，学生のデザイン力を体系的に養成する。将来的には，学生が有償で地域や企業のデザイン支援に携わる仕組みを構築し，教育と社会貢献を両立するプロジェクトとして展開したい。そして，学生にとってコース選択やゼミ選択，さらには卒業論文のテーマ選定，キャリア選択において，有益な経験となるようにしたい。

注釈

注 1)「（一社）ため池みらい研究所」については，環境人間学部の情報サイト「かんなび」を参照されたい。https://shse-maga.com/study/913

注 2)「播磨畦師」については，2022 年度のエコ・ヒューマン地域連携センター活動・研究報告集を参照されたい。